

海外ボランティア活動報告

JICA 出前講座の講師に本学卒業生が！！

独立行政法人国際協力機構（JICA）では開発途上国の現状を知り、国際協力の必要性を広く理解していただくため、実際に開発途上国で国際協力に携わってきた青年海外協力隊経験者などを講師として学校（小、中、高校、大学など）、地方自治体や市民講座、国際交流市民団体などへ派遣する「JICA 国際協力出前講座」を実施しています。

グローバル化が進む中で、麻布大学の学生も将来何らかの形で海外との係わりを持つ機会も多くなると思われるため、3年前から JICA 出前講座を利用して海外の現状や国際協力について学ぶ機会を設けてきました。今年度もこの制度を利用して、生命環境科学部食品生命科学科 1 年生を対象に開講されている「フレッシューズセミナー」と、獣医学部 5 年生を対象にした「産業動物獣医総合臨床」の講義で、本学の卒業生で青年海外協力隊員として 2 年間の海外ボランティアを経験した藤井蘭さん（2013 年 9 月～15 年 9 月まで、フィリピンに派遣）、石川郁美さん（2011 年 1 月～13 年 1 月まで、サモアに派遣）の二人を講師に迎えて、現地での活動について話をして頂きました。

7 月 4 日の「フレッシューズセミナー」で講師を務めた藤井さんは、任地の酪農家の牛乳生産量の増加、品質の向上の支援を目標に、国家酪農局東ネグロス州事務所を拠点に活動をしました。藤井さんは大学卒業後岡山県で産業動物の臨床獣医師として働いた後、「世界のことを知らないで生きて行くのかと感じ、もっと色々なことを知りたい」との思いで協力隊参加を決意したそうです。フィリピンの牛乳は多くが輸入で、国内生産は 4%にすぎず、産業としてよりも庭先での飼育が主であり、販売されている牛乳の大半がニュージーランドなどから輸入されるロング・ライフ牛乳であることなどを説明された。任地の牛乳加工場に、体細胞検査という基本的な乳質検査を導入し、定期的に検査を行い乳質を改善するシステムを作ることを目標とした。また、自分が帰国した後もその活動が現地の人たちによって引き継がれる様に考えたが、そのことがなかなか難しい事だったと活動の困難さを話された。現地での困ったこと大変だったこととして、英語は話せた方が面白いが、言葉が通じたからといって理解できるものでもない、言葉と常識の壁をあげられた。また、ボランティアには定まった定義や形があるものでなく、人それぞれのボランティアがあると思うが、自分は「金銭以外の何かを与える（得る）行動」と理解していると自らのボランティア論を話された。

学生達の感想には、「色々大変だけれど楽しいこともあり、良い経験だった、と話されたのが印象に残った。」「食品関係の仕事を経験することは重要

だと以前から思っていたので、非常に参考になった。」「大学で学んだことをこんなに活かせる位の何かを、私も得たいと思いました。」「実際に青年海外協力隊で活動された先生の話聞いて、活動の大変さと同時に、活動をとおして途上国での達成感も分かりました。また、ボランティアとは何かということも考えさせられました。」「大学で学んだことを海外に行って活かすには、しっかり勉強しないとイケないのだと思った。海外で協力隊として活動する人たちがカッコいいなと思った。」など、日頃の授業では聞けない内容に興味を持ち、海外での活動に対する思いも少し膨らんだようでした。

7月12日の「産業動物獣医総合臨床」で講師を務めた石川さんは、卒業後動物病院で獣医として勤務したあと、大学時代から海外旅行をして海外に関心があったこと、先輩が協力隊に参加したことなどがきっかけとなり、協力隊に参加されたそうです。南太平洋の小さな島国サモアで、NPO サモア動物愛護協会、犬や猫を対象に獣医として活動されました。サモアでは番犬として犬を多く飼っているが、大半が放し飼いだそうです。このため数が増えすぎないようにする不妊手術が主な仕事だったそうです。犬や猫の診断、治療の費用は、一般のサモア人にとっては高額なため、お金持ちしか動物病院を利用できないこと、獣医の多くがニュージーランドやオーストラリアから来ていることなど、サモアの獣医分野の現況や、サモアで見られる小動物の症例を、写真を交えて報告され獣医を学ぶ学生にとっては大変参考になった報告でした。最後に、世界の小動物臨床を見てみたい、開業したいという夢を語られました。報告を聞いた学生からは、現場からの報告にはやはり迫力がある、少し海外に関心が出てきたといった声が聞かれました。

石川さんは講義のあと、浅利昌男学長と面談し、協力隊に参加した動機や、現地での活動について報告しました。浅利学長からは、現地での家畜疾病や獣医師事情、活動で困った点などの質問があり、石川さんは当時を思い出しながら丁寧に答えられました。最後に、浅利学長は、「卒業生のこうした海外活動を聞くことは学生に興味深く、将来海外に目を向ける機会にもなるので、今後もこうした講義があれば良い。」との感想を話されました。

1998年（平成10年）～2014年3月までに、麻布大学卒業生29人が協力隊に参加し、現在も1人が活動中です。派遣職種は食品衛生、エイズ対策、感染症対策、環境教育、理数科教師、生態調査、臨床検査技師、獣医師、家畜衛生、家畜飼育と多岐にわたっています。今回の報告の中でも、青年海外協力隊の仕組みについて説明がありましたので、講義を聴いた学生の中から、協力隊を志す人が出てくれば心強いと思います。